

ビッグバンは保険市場を競争的・効率的にしたか

武蔵大学 茶野 努

九十年代半ば以降、ビッグバンによって保険分野での規制緩和も進んだ。保険市場の競争が促進され、保険業の効率性は向上したのか、その効果を検証した。戦後の保険規制の特徴は、銀行同様に護送船団方式による市場競争よりも業界の安定を重視するものであった。損保では料団法により価格カルテルが認められていた。しかし、九五年の保険業法改正で、規制緩和による競争促進・市場効率化（生損保の相互参入、商品・料率の規制緩和等）が打ち出された。さらに、日米保険協議の合意を受け、九八年に料団法が改正された。

戦後は「二社体制」と呼ばれる国内会社専有の時代が続いたが、七十年代半ば以降外資を中心に緩やかな新規参入が相次ぎ、保険業法時の生損保相互参入時に会社数が急増した。ビッグバン後は、合併・買収により企業数が大幅に減少に転じた。ハーフィンダール・ハーシュマン指数をみると、損保では総資産・経常収益ともに大幅に上昇、生保に比べ急激に市場の集中化が進んでいる。市場構造・行動・成果仮説によれば、損保では競争状態が悪化する一方、生保は競争状態が変わらないか、緩やかながら好転していることになる。

そこで、市場競争度の指標であるH統計量を計測した。この値が0より小さければ独占、1であれば完全競争、0と1の間であればチェンバレンの独占的競争を意味する。ビッグバン前後の二期間に分けた推計の結果、生保の値は0.430と0.434でチェンバレン均衡の状態にあり、かつ競争度に変化が見られなかった。一方、損保の場合0.112と0.777でチェンバレン均衡にあるものの、ビッグバン後は競争度が高まっており、より完全競争の状態に近づきつつあるという対照的な結果が得られた。

競争度の変化が効率性の改善に結びついたのかをみるため、DEAを使ったマルムクイスト指数を計測した。同指数は、各企業の効率性の上昇を示す「キャッチアップ効果」と、二時点間の効率的フロンティアの変化を表す「フロンティア・シフト効果」に分解できる。計測結果によると、損保の場合、ビッグバン前には効率性の低下が見られたが、ビッグバン後では効率性が大幅に上昇している。これに対して、生保の場合、両期間とも効率性は上昇しているものの、フロンティア・シフト効果を見ればむしろ低下している。この両業態の違いは、損保では合併・買収の対象となった保険会社が効率性の改善に大きな影響が及ぼして、経営改善に向けた前向きな合併・買収である一方、生保では経営破綻会社等の外資による救済合併・買収が多く、効率性の改善に結びついていないことによる。

以上、損保市場はビッグバン前の非競争的で効率性が損なわれていた状態から、価格カルテル撤廃によって競争が活発になり効率性が改善した。この点でビッグバンの効果を積極的に評価できる。一方、生保の場合、損保ほどには競争度、効率性が改善しておらず、ビッグバンの効果を評価しづらい。一層の競争促進を図るうえでは、チェンバレン均衡の特徴である製品差別化が問題となる。保険会社に対する消費者の情報劣位（情報の非対称性）によって、製品差別化戦略を通じた価格競争の緩和を行いやすいからである。